

# 『戦争プロパガンダ 10 の法則』

## を読む

2008.7.26a

札幌たのしい授業・研究サークル用レポート

仮説実験授業研究会・北海道

丸山秀一



Arthur Ponsonby=アーサー・ポンソンビー(1871-1946)は、英国の貴族の家に生まれました。英国の第一次世界対戦参戦に反対する彼は、1914年、貴族なのに労働党に入り、運輸大臣などを歴任し、労働党のリーダーとなりました。しかし、1940年に労働党が挙国一致内閣に加わると、戦争反対を貫く彼は、労働党から脱退しました。

彼は1914年に「英国の外交政策を、継続的公的に監視する」ために「民主政治連盟」=Union of Democratic Controlを仲間と結成し、英政府の戦争プロパガンダを批判してきました。当時、英国には徴兵制がなく、政府はプロ

パガンダによって国民を戦争に駆り立てる必要があったのです。

彼は「戦争プロパガンダの基本的なメカニズムは十項目に集約できる」として『戦時の嘘』としてまとめました。それを、ベルギーの歴史学者アンヌ・モレリが、現在までの状況を加えてまとめたのが『戦争プロパガンダ 10 の法則』です。それを予想しながら読んでいきましょう。

(ゴシック体の部分は、ほとんどこの本からの引用です。ただ表現を改めたり、要約したりしています)

### 【質問】

まずここでいう「プロパガンダ」とは、「政治宣伝」のことですが、それがどういう意味なのか、知っている人に説明してもらいましょう。

また似たような言葉の「アジテーション」=「アジ」はどうでしょう。



第二次世界大戦時の米国のプロパガンダ・ポスター

「あなたが単独で運転するときは、ヒトラーと一緒に運転していることになる。自動車共有クラブへ加入しよう」

## プロパガンダ

『世界大百科事典』には次のようにあります。

政治宣伝 せいじせんでん propaganda

政治的意図に基づいて比較的多くの人々にメディアと政治的メッセージをもって働きかけ、その意見、態度、感情、行動、思想を、特定の方向に編成し、操作し、動員しようとする事。プロパガンダの訳語。統治者であろうと反乱の指導者であろうと、何がしかの大衆の支持を必要とするから、政治はつねに政治宣伝を欠かすことはできない。政治宣伝は、宣伝する者から宣伝される者への一方向的な大量伝達であって、対話的なコミュニケーションや相手の自主的判断を前提とする説得とは異なる。また政治宣伝と扇動(アジテーション)とを区別して、前者を指導層の理論武装化、後者を大衆の組織化とする立場(たとえばレーニン)もあるが、実質的には両者は地続きで区別し難い。

### 【問題】

民主主義の国では、国民が賛成しないと戦争ができません。かくして国家はプロパガンダを通して、国民を導こうとします。

それでは、近代の国家元首が戦争を始める直前に必ず言う台詞とは次のどれでしょうか。それは「戦争プロパガンダ」の基本をなすものなのですが、どんな言葉でしょうか。

予想

ア 「我々は戦争をしたくない」

イ 「正義は我にある」

ウ 「神のご加護を」

エ そのほか

「我々は戦争をしたくない」

ポンソンビーによると、近代の国家元首は、戦争を始める前には、必ずといっていいほど「我々は戦争を望んでいない」というそうです。

第一次世界大戦の 1914 年、フランスは召集令発布に際し「徴兵は戦争のためでなく、平和を維持するためである」と宣言し、翌年のドイツ首相は「我々は決して戦争を望んでいない。国家の繁栄は平和の中にこそある」と宣言していました。

#### 【問題】

それは第二次世界大戦以降も同じだったのでしょうか。

予想

- ア 第二次世界大戦のときは同じだったが最近はずう
- イ 第二次世界大戦以降も同じ
- ウ 第二次世界大戦以降はずう

「その影を子どもたちに触れさせてはならない。戦時国債を買おう」



### 「平和への意志」

第二次世界大戦前、米大統領は軍増強のために多額の予算を投入することに際し、「我々が戦争を望んでいないことは、全国民はおろか、世界中の国々に知れ渡っている。我々は攻撃のために軍隊を動員するのではない。だが、防衛のための力が必要なのだ」と述べました。対する東条首相も「平和を望み、開戦はしたくない」と表明していたのです。

ヒトラーも繰り返し「平和への意志」を述べています。彼は「私は英首相に対して、ドイツ国民はひたすら平和を望んでいると保証した」と演説し、フランスに対しては「私は、両国が平和で良好な状態にあることを望んでおり、そうならないはずはないと思っている。紛争の種など一切存在しないのだから」と述べていました。

フランス首相も開戦宣言の時に「私は、最後の最後まで一瞬たりとも休むことなく、平和のために奔走したと自信を持って申し上げます」と述べていました。どうも「誰も戦争をしたくない」のに戦争は起こってしまうようなのです。

### 【問題】

では「戦争をしたくない」のに参戦する理由を国民にはどう説明するのでしょうか。

予想

- |             |             |
|-------------|-------------|
| ア 「防衛のため」   | イ 「国際平和のため」 |
| ウ 「正義を守るため」 | エ そのほか      |

「戦争しないための戦争」

「平和を望む」と宣言する国家が戦争するための次のプロパガンダは「しかし、敵側が一方的に戦争を望んだ」です。つまり「我々はやむを得ず、防衛のために戦争する」ということです。しかし、「誰も戦争は望んでいない」という状態で「防衛戦争」があるというのは、おかしいことです。もっとも最近では米国が「予防戦争」という考えを發明して、「戦争しないための戦争」を行うようになりました。

第一次世界大戦の時、フランスはロシアと協定を結び、動員令を出しておきながら、ドイツの宣戦布告を待ち、「フランスの参戦は非常に不本意であるが、ドイツの突然、卑劣で、陰険な、想像を絶する敵意の表明があったからに他ならない」と発表しました。

フランスの歴史学者も「ドイツが宣戦布告をしなければこの戦争は起こらなかった。ドイツが一方的に戦争を望んだのだ」と発言し、新聞も「戦争を回避するために必要なことはすべてやった。それでも戦争が起こるのならば、大いなる希望を持って戦争を讃えよう」「この戦争がやむを得ないものである以上、誇りを持って戦い抜こう」と宣伝しました。

かくして、第一次世界大戦は「すべての戦争を終わらせるための戦争」として開始されたのでした。

### 【問題】

結局、戦後も第一次世界大戦の開戦の責任は「ドイツ側だけにある」とされたのでしょうか。1919年のベルサイユ条約にはどう記されていたのでしょうか。

予想

- ア あいまいにされていた
- イ 「ドイツ側だけにある」
- ウ そのほか



第一次世界大戦時の米国のプロパガンダ・ポスター

「世界の半分が奴隷で、半分が自由ではいけない。ウィルソン大統領ドイツを語る

彼らの計画はドイツの軍事力と政治力をヨーロッパの中心部から地中海を越えてアジアの中心部まで及ぼす広いベルト地帯を設けることだ。

ドイツ皇帝の宣言「私の意志に逆らう者に苦痛と

死を。私の使命を否定する不信心者に死を。ドイツのすべての敵を消滅させよう。神は、彼らの破壊を求めておられる」

ドイツの世界を軍事力で支配しようという野望がある限り、平和は有り得ない。

## 戦争責任

ベルサイユ条約には、第一次世界大戦のことを明確に「ドイツおよびその同盟国の攻撃によって、強制的に引き起こされた戦争」と記されていました。しかし、戦争後は、連合国も「外交資料を検討すると、ドイツ側だけに一方的な責任はあるとはいえない」という事実を認めるようになりました。「敵国を一方的に有罪とするのは戦争の定石」というわけです。実際、フランスは、外交文書などを改ざんして、ドイツだけに非があるように見せかけていたのです。

それは第二次世界大戦以降も同じで、フランスの学校では現在も「ドイツの挑発的行為により、フランスはドイツと戦争しなければならないような状況になった」と教えられています。日本にも、「連合国側に戦争責任がある」と主張する人たちが少なくありません。フランスは「多くの人が世界平和を求める声を上げていたにもかかわらず、ドイツは耳を貸さなかった」と述べ、ドイツは「ポーランドはドイツ系住民を迫害し、ドイツ領土を攻撃している。これまで中立の立場を取ってきたが、必要な措置を執らざるを得ないことになった」と

ポーランドに侵攻しました。ヒトラーは「ポーランドは国家総動員令を発した。テロの再燃である。私は、彼らに訴えるため、彼らと同様の手段でこれに応じることを決断した」と発言しました。

この図式は冷戦の時も同じでした。米国は地図を示して「米国は共産国に取り囲まれており、防衛のために臨戦態勢にある」と国民に説明していましたが、それはソ連でも全く同じでした。





米コミック『これが未来か 共産主義下の米国』1947

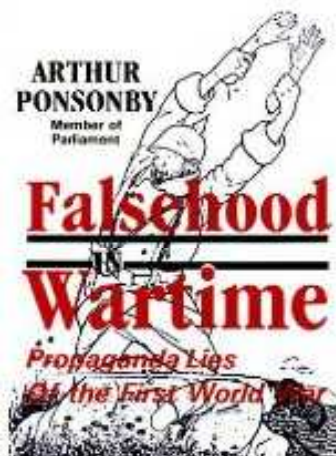
【問題】

1999年、NATOはユーゴスラビア空爆を開始しました。NATO加盟国には「加盟国が攻撃を受けた場合は、ほかの加盟国も戦闘状態に入る」という義務がありますが、ユーゴスラビアはNATO加盟国を攻撃したわけではありません。ではNATO諸国は、この空爆をそれぞれの国民になんと説明したのでしょうか。

予想

- ア 「防衛戦争である」
- イ 「国連決議による行動である」
- ウ 「ユーゴがNATOに戦いを挑んだ」
- エ 「正義のための戦いである」
- オ そのほか

ポンソンビー『戦時の嘘』新装版



## 戦争の論理

NATO 諸国の憲法では開戦を決める権限は議会にあります。しかしこの空爆は、国会の議決によるものではなく、国連や欧州議会で認められたものでもありませんでした。そこで NATO 諸国は、「ユーゴが和平案を拒否し、民族浄化を行い。我々に戦いを挑んだ」と宣伝したのです。「敵は我々を見下している。今こそ我々の力を見せつけてやらねばならない」というわけです。この論理はすでに 1990 年のイラクのクウェート侵攻の際に、「イラクが世界に戦いを挑んだ」として用いられていたものでした。

では「民族浄化をやめさせるため」という理由に正当性はあったのでしょうか。現在、事実として「民族浄化は空爆開始後に始まったもの」ということがわかっています。クウェート侵攻時のイラクも「世界に戦いを挑んだ」わけではなく、イラク側には「クウェート奪回という大義があった」ともいえるのです。

### 【問題】

「我が国は平和を望んだが敵が一方向的に戦争を望んだ」として開戦することはできます。しかしそういった理由の「防衛戦争」では、「敵国や第三国の領土に侵攻する理由」としては不十分です。では「敵国の首都まで進撃する理由」としてどんなプロパガンダが行われるのでしょうか。

### 予想

- ア 「善と悪との戦いである」
- イ 「敵の指導者を倒す必要がある」
- ウ 「完全にやっつけなければ安心できない」
- エ そのほか

## 悪との戦い

それは「敵の指導者は悪魔のような人間だ」として、それに対する国民の憎悪を集中させることです。「敵が悪魔」であれば、それを倒すまで戦争は終わらないでしょうし、「悪魔」と定義することは、キリスト教国においては戦争の大きな理由となります。このことで国民は、戦争を「敵国の一般市民との殺し合い」ではなく、「悪魔を倒すための戦い」と感じられるようになるのです。

「敵が悪魔である」という証拠はでっち上げでかまいません。第一次世界大戦前、ドイツ皇帝は英国で「ドイツ皇帝は高貴な紳士そのものであり、その言葉は幾千の儀礼的な誓約よりよほど信頼できる」と敬愛の念を持ってみられていました。しかし、開戦とともに皇帝は「狂人ドイツ皇帝が、自らが火あぶりとなるとも知らずに薪を積み上げている。この怪物は我々を脅威にさらす。我々は死力を尽くして悪魔のようなやつらを一扫するために歯を食いしばる」と評価されるわけです。

かつてイラクのフセインは、西側諸国の同盟者として高い評価を得ていましたが、湾岸戦争により、「悪魔」や「ヒトラー」とされるようになりました。

もちろんヒトラーも連合国側では「狂人」として国民に報道されました。「ヒトラー=悪の象徴」という図式は定着し、現在でも「あいつはヒトラーだ」というレッテルを貼られたが最後、そのイメージはぬぐえないものになってしまいます。マスコミは「誰にヒトラーというレッテルを貼るか」によって、意図的な報道が可能です。

この「具体的なイメージを持つ悪との戦い」というプロパガンダは、戦争を「勸善懲悪」の単純な物語として、国民に理解しやすくさせます。



「この狂った野獣をやっつけろ。米陸軍に入隊を!」

ドイツ式のヘルメットとこん棒にはドイツ語で「文化」とある。

### 【問題】

多くの戦争は、経済的問題を原因として起こるものです。第一次世界大戦での連合国にも、領土拡大や植民地維持などの目的がありました。では連合国が公表した第一次世界大戦の目的に、こういった経済的目的が含まれていたでしょうか。

予想

- ア はっきりと含まれていた
- イ あいまいな形で含まれていた
- ウ 全く含まれていなかった

「我々は領土や覇権のためでなく、偉大な使命のために戦う」

第一次世界大戦の連合国には次のような参戦目的がありました。フランスは「領土を拡大し、かつての国境を回復する」、ロシアは「バルカン半島での主導権を握る」、英国は「ドイツの領土拡大を阻止し、植民地と海軍の最強国の名誉の維持」、米国は「ヨーロッパ諸国に対する輸出と貸し付けにより、列強の一員となる」。しかし、これらの経済的目的は公表されることはなく、連合国の参戦は「軍国主義打倒、小国の保護、民主主義の確立」とされたのです。

しかし戦争後も軍拡は止まらず、仏露は戦争前に「ドイツとポーランドを分割して領有」の密約を行っており、ロシアは全くの専制政治を行っており、さらにドイツは民主的な選挙で選ばれた国会を持っていました。そして戦争後、連合国はそれぞれ、「まったく期待すらしていなかった分け前」として、領土や植民地などを得たのです。

ユーゴ空爆でも、西側諸国はこれまで市場開放を拒んできたユーゴに「今後は、自由市場経済の原則に従い、外資を含む自由な資本流通に対して開かれたものにする」という約束をさせました。これは表向きの「空爆目的」とは何の関係もないことでした。NATO軍報道官は「武力介入の費用は、これからの新しい市場の確立とその後の経済効果を考えれば、十分元が取れる」と語っています。

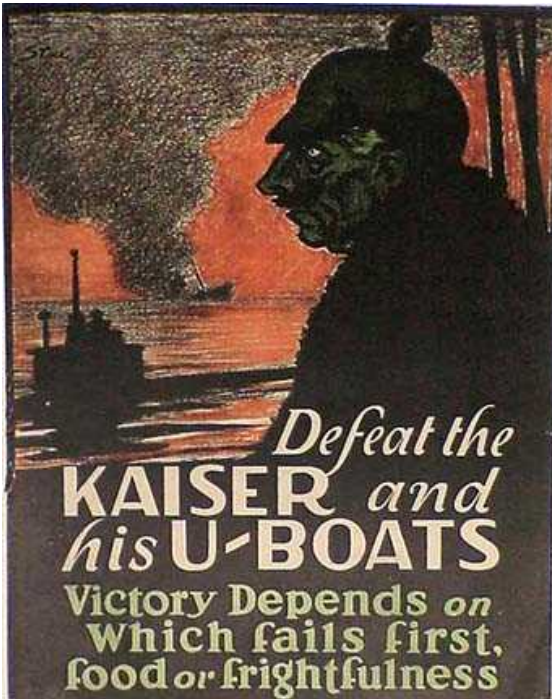
しかし、国家はこれらの目的を国民には隠します。国民にとって戦争とはあくまでも「崇高なる十字軍の戦い」でなければならないからです。

【問題】

しかし戦争の実態は悲惨で残虐行為以外のなにものでもありません。では政府はこの「殺し合い」という残虐行為を国民にどうプロパガンダするのでしょうか。

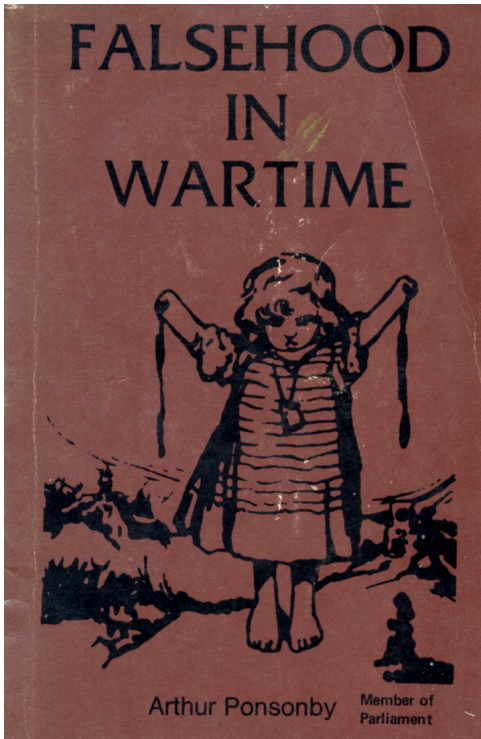
予想

- ア 「残虐行為は敵側だけのもの」
- イ 「敵側は意図的に残虐行為をやっている」
- ウ 「味方の残虐行為は正義感によるもの」
- エ そのほか



皇帝と彼のUボートを打ち負けさせ。勝利は、食料と恐怖、どちらを先に無くすかにかかっている。

「我々も誤って犠牲を出すことがある。だが敵はわざと残虐行為に及んでいる」



戦争そのものが残虐行為であり、それは敵味方を問わないものです。しかし、政府は「我々の残虐行為はミスであり、敵のは意図的だ」と宣伝するわけです。かくして、戦争は双方の「いかに敵は残虐か」というプロパガンダ合戦となります。

第一次世界大戦で、連合国は「手を切断されたベルギーの子どもたち」というプロパガンダを成功させました。「野蛮なドイツ兵が子どもの手を切断して回っている」というのです。この報道は、中

立的だった米国人を参戦へと動かすきっかけにもなりました。しかし、戦後、イタリア首相が、その「かわいそうな子どもたち」を探したのですが、誰一人として見つけることができなかつたのです。（写真はポンソンビーの『戦時の嘘』表紙）

また「フランスの著名な科学者ふたりがドイツ兵によって手を切断された100名の子どもの見たと」という証言の記事を新聞が掲載しようとしたとき、検閲に携わっていた大臣がその科学者たちに「どこで見たのか正確な地名を明かすように」と求めたところ、なんの回答もありませんでした。

第一次世界大戦時、戦場にいた新聞記者は「敵の残忍さを語る記事を送れ」との要請に「家が焼かれてドイツ兵の手にかかる直前に助けられた赤ちゃんの話」をでっち上げて送りました。記事は英国で大評判となり、新聞社には「その赤ちゃんを引き取りたい」という手紙が千通も寄せられ、赤ちゃん用の服も山ほど届けられました。英女王も服を送ってきたのです。

ドイツ側では、連合国による無差別爆撃や、収容所での虐待と虐殺を告発していました。しかし、プロパガンダする側にとって、これらの残虐行為は「ミスによるもの」「仕方のないもの」であり、「敵側だけが残虐行為をやっている」とするのです。

大東亜戦争での日本でも、連合軍の残虐性が「鬼畜米英」などとプロパガンダされ、日本兵と市民は、「残虐行為に合う前に」と自ら死を選ぶものも少なくなかったのです。

ユーゴ空爆では、あるジャーナリストの「目の前で妹を殺されたアルバニア人少女の話」が有名となりました。しかし、この少女の家族は一人も死んではおらず、コソボ解放軍の運動員の少女が作り話をしていただけだったので。そのジャーナリストは、「訂正とお詫び」の報道を、各放送局に要請しましたが、どの局もその放送に反対しました。大切なのは「事実かどうか」ではないのです。

湾岸戦争では、「イラク兵が保育器の中の赤ちゃんを放り投げた」というプロパガンダが盛んに宣伝されました。特にこの話は、議会や国連でも取り上げられましたが、事実は広告会社で作った全くのフィクションだったのです。湾岸戦争では「最後まで戦って倒れた女性兵士がイラク軍に虐待されていたのを救出した」などの嘘もさかんに報道されました。その後のイラク戦争でも、「フセインが穴蔵に隠れていたところを捕まった」などとするプロパガンダ報道は、なくなることがありません。



チョムスキーは米国とその同盟国による「テロ」という言葉の定義について、「敵の行為だけをテロという 定義をしている」と述べています。自分たちの「テロ」行為は、テロではなく、もしあったとしても、「ミス」に過ぎないのです。

【問題】

この考え方によると、「奇襲」や「暗殺」などの「戦略」や、「新兵器」についてのプロパガンダはどういうものになるでしょうか。



インク壺には「ウソ」と書かれている。

「敵は卑劣な兵器や戦略を用いている」

「自分たちにとって正しい戦争」は、その目的達成のためには、奇襲でも暗殺でも拷問でも大量破壊兵器でも、自分たちには許されることとなります。しかし、敵側のこうした行為は「非人道的」とか「卑怯」ということで非難されます。

こちら側の攻撃で相手側の民間人に多くの被害が出た場合にも、「敵は卑怯にも、民間人を人間の盾とした」として非難できます。第二次世界大戦では、無差別爆撃などにより多くの市民が標的となって殺されましたが、自国の行為である限り、それは非難されることはないのです。戦後に戦犯を裁いた法廷でも、裁きの対象となったのは、「枢軸国が行った戦争犯罪で連合国が（おおっぴらには）行っていなかったもの」だけでした。

現代では、この論理はもっと飛躍しています。超大国が、他国を「核兵器や化学生物兵器を保持している」として侵略するのですが、自国が世界一の核兵器などの大量破壊兵器保有国であることは問題にはなりません。「相手側の兵器はすべて不法」なのです。

### 【問題】

大東亜戦争当時、日本は「大本営発表」として嘘の戦果だけを報じていました。こういうプロパガンダは戦時において一般的なのでしょうか。

予想

- ア 多くの国がそういったことをやった
- イ 一部の国だけがやった
- ウ なんともいえない

「我々の受けた被害は小さく、敵に与えた被害は甚大」

第一次世界大戦時、開戦から一ヶ月でフランス軍の死者は 30 万人を超えていました。しかし、フランスは軍馬一頭の被害も、他国がやっていた戦死者名簿の公表もしませんでした。国民の士気が低下するのを恐れたのです。

どの国も、明らかな敗戦については無視し、それ以外の戦果については、すべて「味方勝利」と報道していたのです。そして、報道は、戦後の敗戦国からの賠償金と領土割譲、復興による経済繁栄などの「バラ色の未来」を描いていたのです。

第二次世界大戦でも、日本と同じようにドイツは自国の損失を国民には隠し続けていました。ベトナム戦争では、マスコミがその被害を報道するようになってから、米国民に反戦の気運が高まりました。

イラク戦争では報道記者が軍の管理下に置かれ、「報道して良いものと悪いもの」を指示されました。こうして遺体や棺などは報道されなくなったのです。

ユーゴスラビア空爆では、NATO は空爆の成果を毎日のように発表し、それによると破壊した戦車の数は 120 台のはずでした。しかし、実際に破壊が確認できたのは 14 台であり、目標に命中した爆弾は 40%に過ぎませんでした。

ユーゴスラビアも、米軍捕虜 3 名の写真を何度も報道することで国民に「多くの捕虜がいる」と思い込ませることに成功していました。

【問題】

プロパガンダを行う際は「誰がやるか」というのも重要です。効果的なプロパガンダはどのようなものかといっているのでしょうか。

予想

- ア 政府が中心になって行うプロパガンダ
- イ マスコミが中心となって行うプロパガンダ
- ウ 文化人やタレントが中心になって行うプロパガンダ



「入隊せよ

家に留まっているのは、このような事態を認めていることになるのだ」

「芸術家や知識人も正義の戦いを支持している」

人気のない政府の主張を国民に聞かせるのは難しいことでしょう。プロパガンダは専門家にやらせるのが一番なのです。それは現在では広告業界となるでしょうが、ようは国民に人気がある人物に語らせることです。政府の発表を信じない人たちも、「あの学者やタレントが言っているのなら」と信じるようになるのです。

第一次世界大戦では、まずドイツの科学と芸術を代表する93人によって「文明世界への呼びかけ」というドイツの大義を支持する声明を発表しました。連合国側も、これに対抗して、英国、ロシア、ポルトガル、スペイン、米国、フランスなども同様に知識人による「反ドイツ」の声明を発表しました。知識人はこうして戦争に協力したわけです。

第二次世界大戦では、流行歌手を使った兵士の慰問や世論の煽動が行われるようになり、ラジオやレコードもその役割を果たしました。またプロパガンダ映画も作られるようになりました。

ノーベル賞を受賞したフランスを代表する小説家・批評家であったアナトール・フランスは、「戦争において、もっとも嫌悪すべきものは、戦争によって生じる廃墟ではなく、戦時に現れる無知と愚かさだ」と述べています。しかし、彼も反ドイツ・プロパガンダの声明に加わっていたのでした。

### 【問題】

国民にとって人気がある者たちを動員して「戦争の大義」をプロパガンダさせます。ポンソンビーは「戦争の大義 について国民の支持を決定的にさせるには欠かせないものがある」と言います。それは为什么呢。

予想

- ア 「みんなが支持している」
- イ 「大義が神聖なものである」
- ウ 「家族や子どもたちのため」
- エ そのほか



「どうぞお休みください」

働かないことは日本を利する と訴える米国の戦時ポスター

「我々の大義は神聖なものである」

それは「大義が本当に疑いようのないものであるということ、つまり、聖戦だということ」です。神を信じる者たちにとって、聖戦であるならば、「戦わない」という選択肢はありません。それは宗教上の義務だからです。

かつて十字軍を提言した修道士は次のように語っていました。「信仰ある騎士は、正々堂々と敵を討ち、静かに死んでゆく。死に向かいながら彼らは徳行を積み、殺すことで神に奉仕する。異教徒の命を奪うことは 殺人 ではなく 懲悪 である。キリストのために死ぬこと、殺すことは罪にはあらず、神の栄光に値する行為である」

近年の戦争では、宗教と同様に「民主主義」「文明」「自由」「市場経済」も「不可侵の価値」として大義とされています。「自由を守るため」米国はアフガニスタンに侵攻し、「民主主義を打ち立てるため」にイラクを占領しました。

2000 年に「西側諸国には、民主主義を宗教だと思い込み、改宗させればそれで良しと考える、やや行き過ぎた傾向が見られる」と発言したフランスの大臣は、大きな非難を浴びせられました。

しかし、宗教が戦争の原因ではありません。キリスト教国から成る NATO は「アルバニアを助ける」として武力介入しましたが、アルバニア人の多くはイスラム教徒です。またキリスト原理主義国家である米国の主要同盟国であるサウジアラビアやインドネシアもイスラム教国です。宗教は都合の良いときだけ、戦争に利用されるのです。

## 【問題】

では最後の法則です。これらの「戦争プロパガンダ」を徹底させるための重要な「法則」はなんでしょうか。

予想

- ア 教育にもプロパガンダを導入すること
- イ とにかく繰り返すこと
- ウ 従わないものを排除すること
- エ そのほか



「日本の 共栄 に捕らわれて」



「この正義に疑問を投げかける者は裏切り者である」

戦争プロパガンダに疑問を投げかける者は「愛国心がない」とされ、「裏切り者」とされます。

第一次世界大戦で「戦場ではフランス兵の残虐性もドイツ兵と大差ない」と発言したフランスの教師が禁固二年の判決を受け失職しました。また別の教員は「戦争についての講演で敵軍の残虐性に触れなかった」として解雇されました。

フランスの「戦争に関する資料・批判研究学会」は、「参戦を疑問視する発言があった」として活動が禁止されました。

ボンソンビーも設立に協力した「民主政治連盟」は、英国警察の監視下に置かれ、その集会は数々の妨害を受けました。代表者は「英国が攻撃を受けていない現時点では参戦の必要はない」と説いただけでしたが、彼は自宅搜索され、マスコミはこぞって「敵国のスパイ」「極悪陰謀家」と書き立て、結局逮捕された代表は、強制労働に服役することになりました。

米国でもルーズベルトは「親独的な発言をするものは、逮捕、銃殺、絞首刑、もしくは無期懲役に処すべし」と命じて、実際に多くの人たちが逮捕され、マスコミの餌食になりました。

それは第二次世界大戦の時も同じで、米大統領は「ここ数年、同じ国民でありながら、我が国の捧げた犠牲が無駄であったと思わせるような非国民が存在する以上、我々は彼らに立ち向かわなければならない」と宣言していました。そして戦後は冷戦中の「赤狩り」となっていきます。物証もなく、証言だけで「原爆の秘密をソ連に漏らした」として逮捕された、ローゼンバーグ夫妻は電気椅子で処刑されました。

重要なのは、プロパガンダに反対の者だけがこうした扱いを受けるだけでなく、「慎重に判断しようとする者」「双方の言い分を聞こうとする者」「公式発表の情報を疑う者」は、即座に「敵の回し者」とされてしまうことです。

ユーゴスラビア空爆のとき、フランスの新聞には「フランス人ジャーナリストはだめだ」という記事が載りましたが、その「だめな理由」は、「慎重すぎる」「公式発表を信じようとしない」「難民の証言を取り上げる」ということでした。

このようにいったん戦争が始まってしまうと、もう「戦争の理由を尋ねたり、和平を口にする」といったことは不可能になってしまうのです。もちろん、多くの国の憲法で「言論の自由」が保証されているにも関わらずなのですが。

### 【問題】

この本の著者は最後に四つの「根本的な疑問」を提示します。あなたはどのように思いますか。

我々はこれからも情報を鵜呑みにしてしまうのだろうか。

こうしたプロパガンダの法則は意図的に実行されているのだろうか。

真実は重要だろうか。

何もかも疑うこともまた

危険なことではないのか。

「人食い」



だまされ続けるのか

メディアが発達し、そのメディアを一部の人たちが牛耳っている現在では、プロパガンダは、より効果的に行われることでしょう。しかし、メディアの発達は、マスメディアだけに限ったものではありません。政府や企業から独立したメディアが存在し、誰でもそうしたメディアの発信者となれる時代が来ているのです。

あるユーマ作家は次のように言っています。「現代人はかつてのように何でもかんでも信じてしまうわけではない。彼らはテレビで見たことしか信じないのだ」

陰謀はあるのか

「自社の製品が他社より優れていて必要である」と「だます」ことが目的の広告産業が発展し、心理学がそれに貢献しています。ナチスのプロパガンダの技法を一番学んだのは米国です。プロパガンダは、目的を達成するための手段なのです。

真実に価値はあるのか

イラク侵攻は「イラクが大量破壊兵器を所有しているから」というのがその理由でした。しかし、「イラクには大量破壊兵器はなかった」という事実が明らかになっても、そのことは取り立て問題にはなりません。「あるように見せかけたイラクが悪い」という論理もできてきたのです

プロパガンダは「真実」をでっちあげ、結局ところ人々に「真実なんてどうでもよい」と思わせてしまいます。対立する両陣営がそれぞれ主張する「真実」も同じではないでしょう。

しかし、普遍的な真実は存在するはずで。それは仮説実験で

しか見いだせないでしょう。

### 懐疑主義の危険さ

「何事にもまず疑ってみる」という考えでは、疲れてしまうし、緊急事態には対応できないことになります。また人間にとって疑うより信じる方が楽なのです。

私たちは、「科学の方法」を思い出すと良いでしょう。科学は確かなものだけを積み上げていきます。そしてその「確かなもの」は疑う必要のないものなのです。「イラクに米国を攻撃する意図があるかどうか」などは確かめるのが難しいものです。しかし「大量破壊兵器があるかどうか」は確認が容易で、実際にイラク侵攻前に、国連の査察団によって「存在しない」ということが明らかにされていました。

著者は「疑うのが我々の役目だ」と結んでいます、だまされ



ないためには、疑うことも必要ですが、仮説実験によって「本当のこと」を積み上げてゆくのが一番なのです。「仮説を持って主体的に問いかけ、実験でたしかかなものを積み上げてゆく」

「米海軍だけが、これをやめさせられる」

あとがき

こういったテーマについての学力が異常に高いみなさんには、きっと「あたりまえ」のようなことばかりだったことでしょう。しかし、第一次世界大戦のときのプロパガンダは現在も有効なわけです。そして、現在ではテレビの効果が大きいものとなっています。

G8 について、小笠原さんのレポートに触発されて調べ始めたのですが、「経済についての基礎学力がない」ということが今更ながら判明し、経済の勉強が大変になったため、来月に回すことにして、急遽、こちらをまとめました。

ようやく夏休みですが、こんなに夏休みが待ち遠しかったのは、初めてかも……。終業式の指導部長の話は「三つのクルマに注意」でした。 [shusan3@gmail.com](mailto:shusan3@gmail.com)

典拠文献

- ・ アンヌ=モレリ著，永田千奈訳『戦争プロパガンダ 10 の法則』草思社，2002
- ・ 『世界大百科事典』
- ・ プロパガンダのポスター

Wartime Propaganda

<http://www.100megspop3.com/bark/Propaganda.html>

Wartimepropaganda

<http://library.thinkquest.org/C0111500/>

Wikipedia

東京大学大学院情報学環アーカイブ、第一次世界大戦期プロパガンダ・ポスターコレクション